

＜双葉病院・現地ルポ＞救助難航犠牲次々と 医師不眠不休で回診、避難先医療機器なし
 「避難指示が出されました」2011年3月12日午前6時すぎ、福島県大熊町で防災行政無線が流れた。政府は直前、東京電力福島第1原発の半径10キロ圏内に避難指示を出していた。

双葉病院と系列の介護施設は第1原発から約4.5キロに立地する。病院が遺族に提供した説明資料によると、この時点で職員は町に救助を依頼していたが、まだ正確な状況は把握できていなかった。

入院患者338人の多くが認知症で、寝たきり。末期がんを併発した患者もいた。98人が入所していた介護施設の職員室には「診療録」と「職員家族構成」のファイルが散乱し、当時の慌ただしい様子が浮かぶ。

地震による停電で医療機器が使えず、医師らは余震が続く中、蝋燭を頼りに全てのケアを手作業で行った。11日の最低気温は氷点下2度。水道やガスも止っていた。

12日正午ごろにバス5台が到着すると、まず自力で歩ける患者209人が避難した。医師と看護師はほぼ全員が同行。「すぐ次の救助が来る」と考えての対応だった。

午後3時半すぎ、異様な爆発音と地鳴りが響く。1号機で水素爆発が起きた瞬間だった。直後に全職員が避難した町役場は「死の危険を感じた」と後日、病院に語っている。

続くはずの救助が一向に来ない。残った医師は手分けし、不眠不休で回診を続けた。介護施設ロビーには薬剤がつり下げられた点滴台がそのまま残る。

病院に残された患者は14日朝までに3人が死亡。既に限界が訪れていた。

14日午前4時、自衛隊による救助がようやく再開され、132人がバスで移動を始めた。大半が重症患者だったが、少ない医療スタッフは同行できなかった。

第2陣のバスはいわき市内の高校を目指した。直線距離で約30キロだが、原発周辺の迂回（うかい）を強いられ、実際の移動距離は約230キロに上った。降車するまでの11時間、医療や排せつケアを施せず、避難先の体育館にも医療機器はなかった。14人が15日朝までに死亡した。

救助は「第5陣」まで続いた。放射線量の急上昇や情報不足によって救助は途切れがちとなり、全員の搬出を終えることができたのは16日未明。低体温や脱水症で衰弱し、避難後も次々に死亡が確認された。

東電旧経営陣の刑事責任が問われた法廷で、対応に当たった男性医師は「原発事故がなければ、患者たちは亡くならなかった」と証言。目にした光景に悔しさを募らせた。」（「河北新報」2019年9月8日付け）

- ・原発事故—双葉病院とドーヴィル双葉の患者がバスでの避難によって50人が死亡
- ・バスの中で、点滴をしてシートの床下で死亡した患者もあり。バスの中は異臭漂う

原発事故と双葉病院の経過

2011年 3月 11日	14時46分	東日本大震災発生。当時、双葉病院と系列の介護施設には計436人が入院・入所
12日	5時44分	政府が東京電力福島第1原発から半径10 ^{km} 圏内に避難指示
	14時	双葉病院の入院患者209人がバスで避難
	15時36分	1号機建屋で水素爆発
	18時25分	政府が半径20 ^{km} 圏内に避難指示
14日	10時30分	患者34人と入所者98人がバスで避難。約230 ^{km} を移動し、いわき市内の高校へ
	11時1分	3号機建屋で水素爆発
	6時12分	4号機建屋で水素爆発
15日	9時	患者47人を救助
	11時30分	患者7人を救助
16日	0時35分	自衛隊が残された患者35人を救助。病院内やバス車内、避難先で多数が犠牲に

〔注〕病院の説明資料や政府事故調査委員会報告書などを基に作成



【双葉病院東病棟1階のデイルーム多くの患者がここに集められ救出を待った(11年3月)】



【入院患者が集められ、職員は今後の対応を協議していた11年3月11日午後3時5分】
(次号の「双葉通信」【第84回】を是非読んでください!)